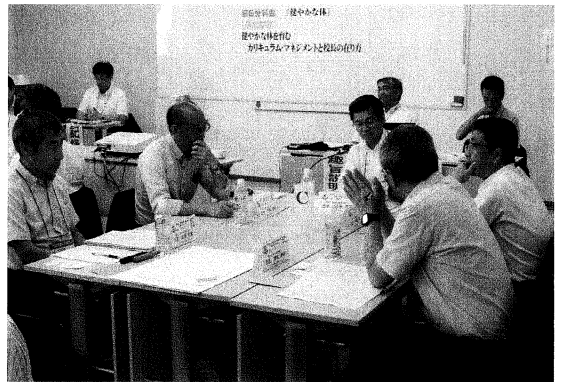


第6分科会

健やかな体

研究課題

健やかな体を育む カリキュラム・マネジメントと 校長の在り方



I 趣 旨

社会環境・生活環境の変化は、人々の生活様式に大きな影響をもたらしたばかりでなく、子どもたちの心身への影響も大きく、体力・運動能力の低下をはじめ、ストレスや肥満傾向の増加、生活習慣病への危険性の高まりなど、様々な健康問題を引き起こしている。また、運動への関心や運動する意欲の低下、さらに、運動する子どもとそうでない子どもの二極化が進んでおり、子どもの体力の低下傾向や生活習慣病等が問題となっている。

こうした状況の中で、子ども一人一人に運動や健康・安全の大切さについての意識を高め、自らの健康を適切に管理し改善する能力を培うことは重要な課題である。

また、子どもが学んだことを、実社会・実生活に生かすことができるように家庭・地域との連携を強化し、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育み、運動のできる環境も含め、健康で安全な生活を送ることができるような教育課程の編成・実施等が求められる。

これらのことを踏まえると、学校での教育活動とともに、家庭や地域の役割を明確にし、学校・家庭・地域の密接な連携・協働が必要と考える。

II 研究発表および討議

☆ 研究発表

生涯を通じた豊かなスポーツライフの実現と
健康課題に適切に対応するための教育活動の推進
檜山地区 乙部町立明和小学校 買手 郁史

☆ 研究の概要

1 研究推進計画と具体的な取組内容

(1) 檜山校長会の推進計画（3カ年計画3年次）

- ① 平成29年度
取組の視点に対する学校の実態を明らかにする。
- ② 平成30年度

各校の取組の実態を考慮し、効果的な取組の方策を実践する。

③ 令和元年度

取組の成果と課題を明確にし、改善する。

(2) 具体的な取組内容

健やかな体を育むカリキュラムマネジメントと校長の在り方として次の二つの視点を設定した。

〔視点1〕生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する教育活動の推進

〔視点2〕自らの基本的な生活習慣を見直し、様々な欲求やストレスに対し適切に対処できる力を育む教育活動

2 檜山管内の実態

小学校数20校、全てがへき地指定校で、小規模・極小規模校である。スクールバス利用者が多く、放課後活動・下校時刻など、教育活動に制限・制約が生じている学校も少なくない。

平成30年度檜山管内学校保健会による統計調査では、身長・体重とも全ての学年で男女とも、全国平均と同値か上回っている。

体力・運動能力調査の実技体力合計点において過去3年間、男女とも全道トップであり、全国平均を上回っている。

3 実践例

【視点1に関わって】

全小学校において、朝や業間など体育の授業以外で、「縄跳び」や「ランニング」など様々な形で体力・運動能力向上の取組が行われている。

「校内マラソン大会」や「町民なわとび大会」などと運動させ、自己目標を設定して練習に取り組んだり、記録を掲示して達成状況や成果を「見える化」したりすることで、運動意欲の向上と継続につなげている学校も多い。

新体力テストを全学校・全学年で実施し、課題を分析して取り組み、再テスト等により伸びを検証している。

児童会等の取組として、全校遊びや縦割り班によるゲ

ームなど、楽しみながら体を動かす活動も進められている。

【視点2に関わって】

子どもたちの望ましい生活リズムの定着を図るため、多くの小学校で「生活リズムチェックシート」や「生活点検カード」を家庭との連携のもと活用している。

「健康教育に関すること」では、各校で養護教諭・保健部などの分掌が中心となり、栄養士や栄養教諭、保健師や保健所、警察・給食センターなど各種関係機関と連携しながら取組が進められている。

☆ まとめ

成果

- (1) 新体力テスト、マラソンや縄跳び、鬼ごっこなど、運動する楽しさを味わえるよう工夫した各種体力づくりの取組を積み重ねてきたことにより、子どもたちの運動への意欲、体力・運動能力が高まってきていると考えられること。
- (2) 様々な関係機関と連携することにより、専門性の高い取組や学校職員の枠を越えた幅広い取組が行え、児童の興味・関心、運動技能を高めていること。
- (3) 小規模校が多く、道具や器具、グラウンドや体育館などの環境や条件に恵まれていることから、体育の時間や日常生活において、子ども一人当たりの運動機会や運動量が多く、体力・運動能力を底上げしていること。

課題

- (1) 自己管理に繋がる働きかけが弱いこと。
町独自で作成した「生活点検カード」を活用・分析し、学校とPTAが協力して子どもたちに学習・生活習慣向上に向けた働きかけを進め成果をあげている町もあり、今後このような取組を広めていく必要がある。
- (2) スクールバス等の利用率が高いため、登下校時に「歩く」等、日常の運動の機会が少ないことが懸念され、日常的に遊びや運動に関わる機会や環境づくりが必要であるということ。管内では、児童・職員が歩数計を常時携帯し、学校ぐるみで「歩く」ことを奨励している例やPTAや子ども会、地域ぐるみでスポーツレク等を行っている例などもあり、このような活動・取組を参考に、地域との連携を図りながら進めていく必要がある。
- (3) 全校的に体力づくりの取組のデータ等を継続的に記録・掲示（「見える化」）することへの仕組づくりが課題である。一校一実践的に、個々の記録を整備し、全校的にカード・一覧表・地図などを活用して、「見える化」を図る組織的な取組が、既に各校で工夫されており、今後も更なる目標づくりや意欲付けに



つながるよう取組を進めてかなければならない。

☆ 研究討議

研究発表に関する全体討議

(1) 体力づくりについて

目標成果の「見える化」が、子どものモチベーションを高め、継続した取組につながり、それにより、教師のやる気にもつながる。達成可能な目標設定や声かけも大切である。

(2) 連携の重要性について

授業だけでなく、まちぐるみのイベントに参加したり、様々な組織と連携したりすることが大切である。実践している学年間の交流、小学校の先生同士の連携、関係機関との交流・連携で、支援や協力を得ることも重要である。

(3) セルフコントロールとは

体力づくりにしても、学習にしても、自分で意識をコントロールして継続した取組につなげることが大切という意味でこの言葉を使った。

【視点1の討議の柱】子ども自ら望ましい運動習慣を身に付けて体力向上につなげるために、校長はどのようにカリキュラム・マネジメントを発揮し、日常の取組や授業の充実を図るか。

(1) 共有を意識した校長の指導性について

共有を図る指導性がとても大切である。目標や願いを共有したり、分析内容やその後の方向性を共有したりすることが大切で、それらを具体的に分かりやすく提示していくことが必要である。

(2) 系統性を意識した取組や人材の育成

体力づくりでは、継続性・定着性、そして、向上性が大事であるが、そのためには、系統性を踏まえた取組をどう仕組んでいくかが大切である。また、専門性の高い人材が抜けることで、活動が停滞しないよう、組織の調整、分掌の調整に努め学校力を高

めること、そのことにより人材育成を進めることが肝要である。

(3) 共通理解の重要性について

校長が体力テストの数値などを根拠にした的確な方向性を示し、共通理解に立つことは重要である。方針を明確にし、成果を実感させ、継続の働きかけをすること、そして、次の目標をどうするか投げかけることなどが重要であり、それらを組織として共有できるかどうか鍵になるとの認識で一致した気付きを促し、現状を打破する校長のリーダーシップが重要である。

(4) 小・中連携について

小・中の管理職が話し合い9年間を見通したカリキュラム作成を進める。健やかな体を育む別様のカリキュラムづくりも大切ではないか。体育の授業改善で運動技能の向上を図り、楽しさを味わわせることが大切である。

(5) 小規模の学校では

全校体育で、それぞれの目標をもち、高学年が指導性を発揮する取組を教育課程に位置付けている。

【視点2の討議の柱】子どもが健康で望ましい生活習慣を身に付けるために、校長はどのように家庭や地域と連携をとって教育課程の改善を図るか。

(1) 望ましい生活習慣を身に付けさせる

家庭との連携が大切である。なかなか難しいが、生活リズムチェックシートから、課題・傾向を把握し、こまめに家庭へ情報発信している。子どもが生活時間を意識できるように取り組むことが大切である。

(2) 方針を明確に取り組むこと

いかに方針通りに学校を動かせるかが鍵である。子どもの課題をしっかりと分析し、学校と家庭で共有できる方向性が大切である。担当者への声かけや地域への働きかけも大切である。学校説明会での校長の説明の内容を学級懇談でも取り上げさせるなどチームとして連動した取組を行いたい。

Ⅲ ま と め

視点1で、討議された内容は、以下(1)～(4)の通り。

- (1) 子どもの体力・運動能力、運動習慣に関する実態を全職員で共有し、教育計画において意図的に体育的な活動を位置付け、9年間を見通した取組を行うこと。
- (2) 体育の授業改善では、体育科の専科教師を中心とした改善の他、職員の研修の機会を増やすこと、中

学校体育教師の乗り入れ授業及び地域のスポーツアドバイザー・体育指導員等を活用した授業を導入することなど、関係機関・地域と連携して改善すること。

- (3) 過去のデータを基に、望ましい運動習慣を身に付けるためのビジョンや具体例を示すとともに、子どもの体力・運動能力の伸びを可視化し、組織が十分に機能するよう体制を整備すること及び意欲を高める手立てが、運動習慣を身に付けることに繋がること。
- (4) 児童が日常的に体を動かし、運動に親しむための「時間」「空間」の確保は、「働き方改革」との関連からも探究し続けていく必要があること。

視点2で討議された内容は、以下(1)～(3)の通り。

- (1) 子ども自らが生活リズムを意識して改善するために、可視化の取組など工夫すること。
- (2) 望ましい生活習慣の確立に向けた保護者との課題意識の共有と連携を持続すること。
- (3) 保護者だけでなく、生活習慣の確立に向け専門機関と連携した啓発的な取組を行うこと。そのために校長のパイプ作りが重要であること。今後は、CSの活用も考えられることが話題となった。

討議と発表により、研究課題における校長の果たすべき役割・指導性について確認できた。その中で、「共有」「啓発」「発信」「現状を打破する校長のリーダーシップ」などの新しいキーワードも出てきた。

「第6分科会に参加して」

厚沢部町立鶉小学校 本谷弘之

研究発表は、檜山地区乙部町立明和小学校の買手校長が「健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方」と題して檜山地区の取組を発表されました。

グループ討議では、子どもに「体力向上につながる運動習慣を身に付けさせるための」、また、「健康で望ましい生活習慣を身に付けさせるための」校長の指導性を討議の柱に、学校規模別に六つの小グループに分かれて討議を行いました。

それぞれのグループの討議内容の発表では、「小中9年間を見通した取組」「気付きを促し、現状を打破する校長のリーダーシップ」「こまめな情報発信」「地域と深く結びつくためのパイプ役」といった内容が印象に残りました。また、どの討議でも「共通理解」「共有」というキーワードが用いられており、校長として学校経営を行う上で忘れてはいけないことはどれも共通のことなのだと、あらためて実感させていただきました。今後の学校経営に向けてのご示唆をいただきました。ありがとうございました。